

# 原爆とエロス「生の衝動」

——川上宗薫の自伝的小説をめぐって

石川 巧

1

川上宗薫は大正十三年四月二十三日に愛媛県宇和町卯之町で生れている。本名は川上宗薫（かわかみ・むねしげ）。父がプロテスタントの牧師だった関係で、小学校の頃は大分県竹田町（小学校一年〜四年）、同三重町（小学校五年）と移り住み、長崎市の飽之浦小学校を卒業している。昭和十二年四月にはメソジスト系のミッシオン・スクールである長崎の鎮西学院（中等部）に入学。途中、病気で休学したため六年かけて同校を卒業したのち、第七高等学校や長崎高等商業を受験するものとともに不合格となり、昭和十八年四月、福岡市の西南学院に進んだ。

翌十九年九月、長崎の大村にあった陸軍連隊に入隊するが、既往症の肋膜炎を悪化させようとしたり断食を執行したりして何とか除隊になることを切望し、復員までの一年近くを佐賀県にある大村病院の分院で過ごす。自伝的小説「弱者の発想」（『或る体質』昭和47年11月・中央公論社に所収）のなかで、「……私は軍隊に入った。私はふだんは弱い猫が追いつめられたような気持

になり、必死になった。私は便所に入るたびに背中を拳で二百ずつ叩いて多少わるいはずの肋膜炎を悪化させようとしたし、内務班では毛布の埃をできるだけ吸うようにした。しかし、それだけではだめだとわかると、私は断食を執行した。私はいつも空腹を覚えていたが、その空腹を覚えて、赤い色の高粱飯を戦友たちに分けてやった。食事しない私は班長や古兵からも病氣と思われ、錬兵休になり内務班に日がな寝ておれるようになった。そして、ある日私は診察を受け、敗戦までのほぼ一年間入院していた」と記しているように、川上にとつての軍隊生活は、国家や社会といった大きな力にねじ伏せられていく「弱者」としての自分を思い知らされる場であり、「弱者」である自分がそこで生き延びていくためのさまざま擬態を身につける経験であった。彼は、たとえ狡猾と思われようが、仲間を裏切ったといわれようが、集団の狂気に呑みこまれてしまうことだけは回避しようとし、そうした危機に直面したときにはなりふりかまわず逃走していいと自分にいいかせるために、わざわざ自分の卑怯なふるまいを描き、これは自分の「体質」だということである。

昭和二十年八月九日。長崎に投下された原子爆弾によって、爆心地のすぐそばにあった川上の実家は跡かたもなく吹き飛ばされる。部隊の内務班にいた川上が目にするのができたのは、大本営の発表にもとづく新聞記事だが、その段階では「特殊爆弾」という表現にもさしたる不安を覚えず、「被害は軽微」という報道をそのまま鵜呑みにするしかなかった。だが、その数日

している。

原爆投下から約一ヶ月後、混乱のなかでなんとか廃墟となった長崎に戻った川上は、母と二人の妹の死と、父の生存を確認し、すぐに西南学院に学籍復帰する。昭和二十一年三月には同校商科を卒業し、翌四月には九州大学文学部哲学科（のち英文科に転科）に入学するといった具合に、あわたたしい日々を過ごすことになる。この頃の川上は、自身の原爆体験、すなわち、家族の多くが一瞬にして生命を奪われながら自分は「残存者」として戦後を生き延びているという感覚をひとまず自分のなかに保留し、感傷が外部に垂れ流れることを注意深く警戒しながら学生生活を送る。卒業を間近にひかえた大学四年生のときには「西日本新聞」の懸賞論文に「文学作品を読むこととは」という作品を応募し三等に入選しているし、卒業論文（研究の対象はウイリアム・ブレイク）を準備するかたわら、学友会文芸部に所属して小説を書きはじめてもいるが、恐らく、彼がはじめて活字にした小説と思われる「綿埃」（『九大文学』昭和24年6月）にしても、その内容は恩師にまつわる学生時代の思い出をつづったもので、戦争や原爆に関する記述はいっさいない。川上は遺作となった自伝的小説『遺作 死にたくない！』（『小説WOO』昭和61年・新春痛快号、のち昭和61年4月、サンケイ出版より刊行）のなかで自分の半生を振り返り、「ふと考えることがある。今井は、軍国主義の時代、戦争を体験している。にも拘らず、一度として子供の頃から、無残な死体を見たことがない。平和な時代でも、交通事故による無残な様相を眼にすることはよくあるのだ

後には敗戦がきまり、部隊内にも様々な噂が広まる。川上はのちに自伝的小説「残存者」（『文芸』昭和31年12月）で、「敗戦と決まり、その爆弾が原子爆弾と分り、浦上のあたりはどこがどこだか皆目分らぬほどやられているという噂が拡がって、昌造は初めて大きい不安を感じた。それから、やがて、同じく長崎出身の戦友の一人にハガキが来て、その戦友の一家四人が急逝したことを知った。その戦友は茫然とハガキを見つめていたが、「死んだ、死んだ、皆死んだ」とだけ言って、昌造の顔に普段の笑顔を向けた。別ががっくりした風にも見えなかった。その日、昌造の眼には、その戦友がいつもより却ってまめに立ち働いているように見えた。夜中にふとある気配を感じて昌造は眼を醒まされた。月明かりした中に、隣に寝ているその戦友は、拳を額に押し当てて、微かに声を顫わせていた。そうして、朝と共に彼の姿は消えていた。もうその頃はかなりの脱走兵が出ていた。別に捕縛に向かうということもなかった。逃げた者は殆どそのまま帰ってこなかった」と記し、事態の深刻さを知りながら身動きがとれなかつたもどかしさを、ひとりの脱走兵に仮託して描いている。またエッセイ「父を変えたもの」（『待ちぼうけの自画像』昭和56年7月・文化出版局）には、家族の死を知らせる葉書を受け取ったときだが、「私も父も、ひどくかわいがっていたみどりという女の子がいた。私とは十五ぐらい年がちがっていた。／私が、佐賀県の大村病院の分院で、「操、みどり、かおる、急逝す」という簡単な葉書を受けた時に覚えた悲しみのほとんどは、愛するみどりに向けられたものであった」と記

が、それも無い。彼が眼にするのは、グラビアだけである。しかし、グラビアは、事実とはちがう。／＼今井は、外地には行かなかったが、兵隊に取られたし、家族を長崎の原爆で亡くしている。原爆を落とされて一月ほど経った焼けあとも歩いてる。空襲も受けた。しかし、目の当たりに無残な死体を一つとして見たことが無い。／＼今井は、ときどき、守護霊が彼にそういうものを見せまいとしているのではないかと思うことがある」と記しているが、彼の場合は、原爆の記憶を編成する要素としての「時間」と「距離」について、あくまでも、自分を「遅れて」きた存在、「遠い」ところから眺める存在、に仕立てる傾向が強かった。それは、原爆そのものを体験していない自分が非当事者という立場から被爆を語ることへの躊躇いだったのかもしれないし、経験の量や悲劇の重さにおいて証言の真実性を獲得しようとすることへの嫌悪だったのかもしれないが、間違いなくいえるのは、彼のなかに、「残存者」である自分が死んでいった人間たちの声を代弁するようなまねはするまいという固い決意があったらうということだ。彼は、「叫ぶ連中は嫌いだ」（『待ちぼうけの自画像』前出）というエッセイのなかで、「私は、昔から、叫ぶ連中がきらいだった。教練で号令をかけるのがうまいやつ。学校の勉強はできなくても、教練となると、急に水を得た魚のようになるやつ。てんでんばらばらの意見をなんとか統一しようということに専念するようなやつ。／＼結局、だから私は、ものかきの道を選んだのかもしれない。一人で仕事ができるからだ」と記しているが、徹底的にひとりきりであり続け、

自分の「体質」に率直であろうとする姿勢は、自伝的小説のなかで原爆体験を語るようになったのちにも揺らぐことのなかったスタンスである。

ところで、当時の川上は、すでに岡本英子と結婚生活をはじめており（昭和22年6月に入籍）、生活費を稼ぐために私立長崎女子商業の英語教師として赴任していた。したがって、大学には籍を置いているものの、ときたまゼミに出席するために福岡に戻ってくる程度で、日常生活は英語教師としての仕事に追われる日々だった。また、昭和二十三年三月には長女・みどりも誕生しており、机に向かって小説を書く時間はほとんどなかったと思われる。しかし、そうした長崎での平凡な教師生活に耐えかねた川上は、大学卒業後、わずか一学期だけ長崎の私立海星高等学校で教鞭をとったのち、上京して千葉県の東葛飾高等学校に就職し、夜間教師をしながら作家をめざすのである。昭和二十七年の秋には同人雑誌「新表現」、「日通文学」に参加し、同人雑誌の世界で腕を磨きながら商業文芸誌にも作品を発表していく。「その掟」（『新表現』昭和29年6月）、「初心」（『三田文学』昭和29年11月）、「企み」（『文学界』昭和30年2月）、「仮病」（『三田文学』昭和30年3月）、「或る目醒め」（『群像』昭和30年6月）、「初刊の際「或るめざめ」と改題」、「傾斜面」（『群像』昭和30年10月）、「怒りの顛末」（『文学界』昭和30年11月）、「ひめじょうんの花」（『三田文学』昭和31年2月）、「雨の夜空」（『文芸』昭和31年3月）、「三人称単数」（『三田文学』昭和31年6月）、「夏の末」（『文芸』昭和31年8月）、「残存者」（『文芸』昭和31年12月）、「症状の群」（『三田文

学」昭和32年1月)、「植物的」(「新日本文学」昭和32年4月)、「初夏の愁い」(「新女苑」昭和32年7月)、「疑惑」(「週刊新潮」昭和33年11月)、「不毛の關係」(「早稲田文学」昭和34年2月)、「シルエツト」(「文学界」昭和34年7月)などがこの時期に書かれている。

## 2

学生時代がそうだったように、習作時代の川上も自らの原爆体験については意識的に口を閉ざしている。長崎での生活や軍事教練での屈辱的な体験などは克明に描写しながら、なぜか原爆で家族を喪った出来事だけは素通りし、戦後の教員生活や同人雑誌仲間との交友などに転換させるのである。その川上がやると原爆体験を小説に描けるようになるのは「夏の末」(前出)以降のことである。のちに、はじめての著書として短篇集『或る目ざめ』(昭和31年9月・河出書房)をまとめる際、巻頭に置かれることになる「夏の末」は、こんな一節から語りはじめられる。

原子爆弾が投下されて戦争が終り、翌年、紀彦は大学に入った。けれども、ひどい下宿難から、長崎に帰っていた。

勉学心も乏しかったので、紀彦は、そういう事態をよるこんでいたといつてもよい。長崎は、長崎駅から北にかけて廃墟と化していた。原子爆弾の当時、家は浦上にあつた。

紀彦の母と幼い弟は家にあつて死んだ。家にいなかった父

の加山と妹の百合子が助つた。紀彦は、その時、大村の兵営にいた。紀彦が復員してきた時は、加山は螢茶屋の川べりに家を見つけていた。二階が殆ど崩れた家である。

この記述は、ほとんどそのまま川上の実体験に重なる。フィクション化されているのは、死んだ二人の妹のうちひとり「弟」にし、もうひよりは生き残つたと記している点と、主人公が「兵営」にいたとしている点くらいである。また、原爆の惨状や家族を喪つた悲しみを安直に言語化せず、それらを下宿難の問題や勉学心の乏しさといった事柄と並列させることによつて、そこには、戦中から戦後にかけて自分の身のまわりに起こつた出来事のひとつに過ぎないかのような素つ気なさが漂っている。廃墟となつた長崎に暮らすことの沈鬱さよりも、敗戦後の混乱のなかで、ろくに勉強をしなくても大学生でいられることの気楽さに浸り、「そういう事態をよるこんで」いるように描かれていることからわかるように、彼は原爆を特化して語ることに強い抵抗感をもっている。そんな語り手がまず前景化しようとするのは、プロテスタントの牧師であつた父の姿である。

紀彦の父の加山はプロテスタントの牧師だつた。原子爆弾被災の牧師は世界でも珍しい。そのせいか、アメリカの方々の教会から、月に二つは小包みが送られてくる。罐詰や衣類が主で、衣類の半分は加山の手で食糧に変えられる。

占領軍の牧師からも時々メリケン粉の大袋が届けられる。食糧事情の逼迫した時勢に、紀彦の家だけはそれほどのもなかつた。加山の所属教会は、戦時中に軍に接収され、とりこわされた。それで、加山は、友人の牧師の教会で、その友人と交替に日曜礼拝の説教を受けもっていた。しかし、加山は牧師として生計をたてているわけではなかつた。占領軍の通訳としてかなりの高給を得ていたのである。

紀彦の父は、長崎に原爆を投下した当事者であるアメリカが中枢を担う占領軍の「通訳」をすることで、この時代の日本人にしては「かなりの高給」をもらっている。また、日常においても、アメリカの教会から送られてくる食糧や衣類のおかげで、空腹にあえぐ日本人を尻目に苦勞の少ない生活を送っている。アメリカと戦い、アメリカが投下した原子爆弾で家族を喪つた紀彦は、父を介してアメリカの庇護を受け、食糧難に喘ぐ多くの日本人とは違う生活を手に入れてしまふのである。この小説において、主要な人物が、「母」、「弟」、「妹」といった紀彦との関係で指示されるなかで、父だけが「加山」と呼ばれ、ある種の他者性を付与される理由はそこにある。紀彦にとっての戦後は、大切な人間を亡くした悲しみや生活の困窮からではなく、父であつたはずの男の変節、あるいは、媚態を目的あたりにした衝撃からはじまるのである。紀彦は、そんな父の変節ぶりをこんなふうに理解する。

父の加山は紀彦の生活に干渉しなかつた。戦前は口喧しかつた息子に対する態度が敗戦と共に一変したようだった。加山自身も、新たに筋書を創り直してゆく自由感を自分に煽ることによつて、妻や子供を失つた悲しい記憶の消去を企てていたのかも知れなかつた。

「新たに筋書を創り直してゆく自由感」によつて「悲しい記憶の消去」を企てること。それは、紀彦が父のなかに看取した戦後日本の生きざまであると同時に、紀彦自身の欲動でもある。だからこそ、彼は変節した父から目が離せなくなっているのである。「夏の末」には、紀彦が「己の過去を覗き見たい気持」から、父が月に二度だけ礼拝に赴く教会に出かけてみる場面があるが、そのときの、「今の自由感を、過去と対比させることで確かめたい気持」という内面描写をみてもわかるように、紀彦は父の変節に対して、まるであらかじめ自分がいた場所に後から父がやつてきたかのような既視感を抱いている。廃墟のなかの自由感。それこそが「夏の末」の提起する問題の核心である。急激に世の中が変わつていく「速度のついたような感覚」のなかで長崎での生活をはじめた紀彦は、文化協会の活動に加わり、そこで大津冴子という女と出会う。両親を原爆で亡くし、少年航空兵だつた弟を養うためにミシンを踏み続ける冴子を「無性に欲しい」と思つた紀彦は、冴子が文化協会を辞めたあとでもせつせと彼女を訪ね、メリケン粉を届ける。「私たちにとつては、それは欲しいものだわ。だけど、やつぱり、好意に一方的に甘

えているのって、なんだか、いやだわ。欲しいだけはいやだわ」といつて拒んでいた冴子も、やがて紀彦に心を許すようになるが、ただでさえ栄養失調だった彼女は、胸を冒されて床に臥せる。しばらく会わないでいるうちに、紀彦のなかには彼女の肉体を渴望する気持ちが募る一方で、自分が冴子に占有されていくような束縛感が芽生える。また、「不在の場所」で思い描く冴子の鮮烈な魅力が時とともに色褪せ、「冴子を日々訪ねたその時間を無意味に思う時がくるような予感」さえ抱く。

だが、文化協会の責任者であった駒井という男が、冴子の身を案じて世話をしていることを知った紀彦は、激しい嫉妬に押し出されるように再び冴子を訪ね、駒井との関係を問いただす。

「加山さん、来なかつたわね。来なかつたわね。だからよ。だからよ……」といつて泣き伏す冴子を見た瞬間、紀彦のなかには、自分が完全に彼女の心を「占有」したという優越感が沸き起こる。そして、「手統きを踏む」ような気持ちで「あなたが欲しい」と訴え、病に蝕まれた冴子を抱く。治療費として幾らかのお金を置いていく駒井を拒むことができず、一度だけ関係をもったことがあると、涙ながらに告げる冴子。その傍らで、必死に眠気を泳えながら意味もなく「僕は冴子さんが好きだ」と囁く紀彦。かつては彼女の忍び泣きに「情緒」を感じていたはずなのに、それがあまりにも「具体的」なせつなさとして迫ってきたことで、逆に味けない気分になる紀彦。彼は、冴子の涙が切実であればあるほど、自分のなかに夢から醒めていくような白々しさを募らせるのである。

この小説は、駒井が身許不明の女と服毒心中を遂げたことを報せる新聞記事に接した紀彦が、死んだ女はやはり冴子だったのだろうかという思いを強くし、「駒井を恐らく愛してはいない冴子は、駒井と彼女とのとり合わせの惨めさを特に紀彦に見せつけたかったともいうのだろうか。或いは、紀彦が駒井に見つけた新しい顔を冴子も見つけ、そういう駒井と冴子との間に、他の者の窺い知ることのできない愛の形が生れ、その形は始まりにおいて既に死に辿る定めを担っていたというのだろうか」と想像しながら彼女が臥せていた部屋を訪ねる場面が終わる。

新聞を見せられてとり乱す弟・正夫のまつすくさを前に、「うしろめたい」気持ちをのらせる一方で、「冴子の死様を帯びる事件性を愛している」自分がいることを知る場面で終わる。川上が描く自画像は、恋人だった女が他の男と心中するという衝撃的な出来事を介してさえ、いまだ分裂的であり、欺瞞的であり、露悪的なままである。「妻や子供を失った悲しい記憶の消去」を企てるために「新たに筋書を創り直してゆく自由感を自分に煽る」ことを課した父とはちょうど反対に、彼は、自分という存在の自由性を維持するために冴子に向けられていた感情に泥を塗りたいのである。そこにあるのは「弱者の発想」（前出）に描かれた「体質」と同様の擬態そのものである。占領／被占領という枠組みによってしか男女の関係を捉えることができない紀彦を通して戦後日本のある「体質」を認めようとする視線である。マイケル・モラスキーは「占領の記憶 沖繩・日本における言語・ジェンダー・アイデンティティ」（鈴木直子「訳」、

代思想」平成15年9月)のなかで、「二八八〇年代のライダー・ハ

ガードの冒険小説が描く暗黒の「処女地」に分け入った英国植民地の英雄から、一世紀後のクウェート侵攻を「強姦」という表現で弾劾するアメリカのNBCニュースに至るまで、帝国主義的介入に関する修辭は、女性ジェンダー化され、進軍する男性により性的侵攻を受ける身体を風景に投影する。地理的領土への植民地的ないし軍事的侵攻は個人の身体への性的侵略と関連づけられる。このような修辭は、個人の身体をナショナル・ボディ体同一化し、侵害された女性身体をとくに選び出して、侵入してきた男性支配者を前にした「彼女」の従属と無力とを強調する、というロジックに基づいている」と指摘したうえで、「沖繩と日本の占領に関する男性作家の叙述において、外国の軍隊に対して無防備な状態に曝されるのは女性だけではない。男性登場人物もまた、とりわけ身近な女性を横暴な米兵から守ることができない場合にはとくに、無力なものとして描かれる。無力な男性はたいがい、去勢や不能といった性的メタファーを用いて描かれ、占領下の男性を「女性化」し、外国占領下での男性の社会的無力を、おそらく通常の社会的条件下で女性が帯びる無力さと同等なものとして位置づける」と述べているが、川上の自伝的小説においても、その構図は踏襲されている。詳しくは後述するが、そこには、原爆によって日本を占領したアメリカというロジックと同時に、原爆症によって女性としての性的魅力を蹂躪された日本人女性と、アメリカの侵攻によって「去勢」され、それを茫然と眺めるしかない日本人男性という関係が表象

されているのである。

ところで、「夏の末」には長崎への原爆投下に関する描写がもうひとつある。それは、紀彦が中学時代の学友とばったり出くわしたときに提供される共通の話題として登場する。

……話は大概きまつている。今どこにいて何をしていると、あれからどうしたとか、原子爆弾の時はどこにいて家庭はどうだったとか、誰それはフィリップンで、或いはビルマで戦死したとか、原子爆弾で死んだ同窓生は誰々だとか、そんなことを、妙に浮き浮きと、自分らの無事を祝福するかのようになり、とり沙汰し合うのだ。自然と選民意識に似たものを互いに持ち始め、それが親近感を呼ぶのである。

ここでの原爆は、生き残った者たちの「選民意識に似たもの」をかきたてる材料である。バラバラに生きてきた人間たちが、ただひとつの共有物として語り合うことのできる記憶の仕切りである。それは、悲惨で不条理な出来事であったがゆえに、無意味で色褪せた時間のなかに停滞している彼らにかの間の活気を与えてくれる供物となりうる。だからこそ、語り手は、その決定的な出来事を話題にする学友たちのなかに沸き起こる「妙に浮き浮きと」した空気を見逃さず、むしろ、そこにアクセントを置くこととするのである。

また、この場面を同じ「夏の末」の次のような描写を並列させると、川上における認識のありようは鮮明になるだろう。

不精な朝食を一人でとっていると、紀彦の胸には、なぜか、いつも浦上の廃墟が思い浮かんだ。浦上駅には仮小舎ができたりはしていたが、三菱の工場の鉄骨は風に吹かれた雑草のように歪み折れ、重なり合ったままだし、高台の幾つかの学校も押し潰されたり倒壊したままだったし、時々、そんな建築の中から白骨化した死体が見つけられたりしていた。そういう浦上の荒廃した情景を思い浮かべると、

紀彦は、今過している日々が仮の日々であるような気がした。きつと何年か後では、混乱した慌しい感じを伴わずには思い起されることのない日々を送り迎えている、そういう責任のない心だった。人々は飢え、殺気だっていた。未来のいつかに醒めた時に、はつきりと過去の中の一コマとして把握されるにちがいないいびつな現在の中に、歪みに慣れて時を過しているようだった。(その日)という日はなく、(日々)だけが有り、凡ての日は、円周上の任意の一点のようなものだった。

語り手は、確かに「飢え、殺気だつて」いる人々の群れのなかに混乱した慌しさを看取している。いつか「過去の中の一コマ」として回顧したときには、それがいかに「いびつな現在」であったかわかるに違いないという確信もある。だが、そうした「歪みに慣れて時を過して」しまうことは、結局、「円周上の任意の一点」を生きるようなものであり、廃墟を前にしたとき

に感じるような「責任のない心」に支配される……。ここには、人は、いつまでも(その日)を直視し続けることができないかわりに、(その日)を(日々)に置き換え、それを「責任のない心」で想起する存在なのだという認識が明示されている。原爆で殺されずにすんだ学友たちがみせた「妙に浮き浮き」とした表情がそうであったように、彼らもまた、自分自身を追憶的な場所に置くことで悲劇のロマン化に貢献しているのである。

### 3

ところで、川上が自らの原爆体験を小説のなかに描き込んでいくきっかけになった出来事として指摘しておきたいのは、昭和二十九年二月二十八日にアメリカが行ったビキニ環礁での水爆実験(CASTLE BRAVO作戦)によつて、翌三月一日、静岡県焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」が死の灰を浴びた事件である。マーシャル諸島の危険水域外で操業していたにもかかわらず、二十三名の乗組員全員が大量の放射能を浴びたこの事件は、急性放射能症の症状が重かった無線長・久保山愛吉の容態をめぐってマスコミが連日のように報道したことで、当時の日本に強い衝撃をもたらした。核実験の模様を撮影した記録フィルムの映像や、原爆症に侵されていく被害者の症状を報じるラジオや新聞を通して、多くの日本人は、はじめて被爆体験を「見る」という体験をする。また、放射能によつて汚染されたマグロの回収騒ぎが起きたことで、原爆は直接的な被害だけでなく、目



に見えないところで間接的あるいは二次的な被害をも与えかねない恐ろしい武器だという認識が広まる。そして、危険区域外で爆発しただけでこれほど恐ろしい目にあうのだから、あの日の広島・長崎はどれほどの惨状だったのだらう……、というかたちで人々のなかに原爆体験に対する想像力がめばえ、GHQの占領以降、封印されていたアメリカへの憎悪が再びかたちをとりはじめるのである。

原水爆禁止運動が反米運動に転換していくことを避けようとするアメリカ政府は、日本政府との間で被爆者保障の交渉を急ぎ、総計二百万ドル（約七億二千万円）の補償金（死の灰を浴びた被害者への補償金ではなく、漁業被害などの名目で支払われた）と引き換えに「米国の責任を追究しない」という確約を日本政府からとりつけ、事件を早期決着させようとした。日本政府もまた、原水爆禁止運動の広がりや国民生活における不満の捌け口になることを恐れ、問題の沈静化をはかる。そして、原子力の平和利用という題目を掲げ、アメリカの協力のもとで具体的な政策を実行に移す。大石又七『ピキニ事件の真実 いのちの岐路で』（平成15年7月・みすず書房）は、当時の日本政府やマスコミの姿勢を批判する立場から、原子力平和利用のキャンペーンについて次のように記している。

……一九五五（昭和三十）年、読売新聞は元日の朝刊にアメリカ原子力平和使節団の招聘を告げる社告を掲載した。以後、五ヶ月にわたり、原子力平和利用のキャンペーン記事

が読売新聞紙上にたびたび登場することになる。読売も日本テレビも、原子力平和利用特別調査班を作り、使節団受け入れの世論作りに邁進した。（中略）アメリカ国務省の、当時の対日政策の進行状況を記した報告書にも、「核兵器に対する日本人の過剰な反応よりは、日米関係にとって好ましくない。核実験の続行は困難になり、原子力平和利用の計画にも支障をきたす可能性がある。そのために、日本に対する真理戦略をもう一度見直す必要がある」と書かれている。（中略）アメリカから東海村に原子炉が送られてきてからは、読売新聞と日本テレビは、プロレスなど盛んだった娯楽番組の時間をさいて、「原子力の平和利用、原子力時代到来」という大キャンペーンを始める。驚いたことに、正力氏は「原子炉から出る『死の灰』は食物の殺菌や、動力機関の燃料にも活用できる」という宣伝文を、当時の財界紙に載せていた。／やがて原子力の平和利用計画は、原子力船「むつ」の建造へと進んでいく。／庶民もまた、見えない放射能や、遠くで行われる地下核実験よりも、利便さを与えてくれる目先の原子力平和利用のほうに引かれていった。そして、盛り上がっていたピキニ事件に対する関心や、核実験反対の声も潮が引くように消えていった。柴田氏は手記の中で、「こうして原爆におびえ、憎み、反対のろしばかりを上げつづけてきた日本に、初めて『毒は毒をもつて制す』、平和利用へ目を開かせる掛け声が、全国にこだましたのだ。舞台裏に身をひそめながら、喜びと感動

に打ち震えていた」と書き残している。

原子力をめぐる議論は、こうして人道問題としての側面が隠蔽され、エネルギーや経済の問題へとすりかえられていく。第五福竜丸の被爆からわずか八ヶ月後の昭和二十九年十一月には、水爆実験によって目醒めた太古の怪物が東京を火の海にするという映画「ゴジラ」が封切られ、昭和三十四年二月には新藤兼人監督・脚本で映画「第五福竜丸」（制作／近代映画協会）が公開されるなど、フィクションの世界では核の恐怖が正面から描かれるようになるが、政治的には、核を平和のために利用することで人類の明るい未来が約束されるかのような情報戦略が世論に浸透していく。島田興生が「ピキニの被爆者たち―残留放射能のつぼの中で―」（『長崎の証言』昭和53年・長崎の証言刊行会）のなかで、「『ピキニ』と言えば、第五福竜丸と久保山愛吉さんを語る」枕ことばとして使用されるのみで、一般的には、女性のあの水着として使われる方が何倍も多かったからである。しかし、原爆と女性の下着の代名詞として両極端に使われたにしろ、「水着」のピキニの語源もまた原水爆実験の衝撃から命名されたものであったのを知っていたのはごく一部の人間だけであつたようだ」と論じたように、「ピキニ」は事件の本質が解明されないまま、いつの間にかその衝撃力だけが比喩として用いられるようになり、あろうことか、露出度の高い女性の水着をさす言葉に転用されたりもしている。

また、ピキニ事件をめぐるマスコミ報道は、広島・長崎にお

ける原爆被害の実態を知らしめるだけでなく、原爆にまつわる様々な差別を助長されることにもつながった。山下茂が、「昭和20年代には、一般国民の原爆被害への認識はまだ浅かったのでも、もっぱら、ケロイドなど顔や手足などの火傷痕、いわば外見上の後遺障害に基づいて、結婚などにおける差別が行われた。このため若い未婚の被爆者、特に女性の被爆者でケロイドのある人たちには、結婚の希望を奪われ、将来の人生に絶望するものが多かった。このような状態にある「原爆乙女」たちを救うために、グループを組織して励ましあい、ケロイドの治療を受けるよう援助する活動が行われた。／1954年、ピキニ水爆実験による「死の灰」パニックを契機として、放射能による後遺障害の知識がひろがり、以後は、遺伝や慢性原爆症への不安を理由として、結婚や就職に際しての差別が、被爆者全体やさらにその子供らに対してまでも生じるようになった。既に結婚した被爆者の場合でも、出産に不安を感じたり、生まれた子供が病気になる遺伝のためかと不安に脅えたりする。婚家のしゅうと、しゅうとめや親族の偏見によって離婚を迫られたケースもあつた」（『平和事典』『被爆者差別』の項、昭和60年10月・財団法人広島平和文化センター）と説いているように、広島・長崎への原爆投下から十年近い時間を経て再び起こつたこの出来事は、放射能の後遺症に対する不安をやみくもにかきたてるような報道がなされたことによつて、被爆者だけでなく被爆二世の結婚や出産にまで及ぶ偏見を助長していくことになるのである。

川上は、「或る目ざめ」（『群像』昭和30年6月）のなかで、「学

校出といった感じの青年」たちの会話を「私」が何気なく耳にするというシチュエーションを用意し、そこでピキニ事件を話題にする。「……水爆で吹き飛んだ珊瑚礁のかけらが塵のようになって地球を蔽って、それが太陽の光が地球に届くのを妨げるんだ。太陽の周りに薄赤い輪が見えるってんだ。火山の爆発の時にそういう現象が必ず起るらしい。冷害も今年の長雨もその故なんだって。ピシヨップってのは何でもハワイの学者の名らしいね」、「怖いみたいだね。人間が太陽に傘をささせるなんて。ピシヨップの輪か」、「神を怖れないって感じだな」といった青年たちの会話を聞いた「私」は、それがいかにも「社会正義を代表する声」だと感じる。「社会正義を代表」しようとする人々は、水爆実験の繰り返しによって自然界に大量の放射能が蓄積されていることを警告しようとはするが、「放射能はこんなに少ないんだ」と声をあげて喜ぶようなことはしない。水爆が環境に及ぼす影響を懸念するような記事をみつけては、「どうだ皆分つたろう。水爆の怖しさが、戦争の怖しさが、再軍備の無意味さが、この国土の脆弱さが……」と説き、多くの人々の共感を得ようとする。「私」は、そのようにして諸悪の根源を水爆実験に求め、自分たちに都合のいいデータだけを頼りに「怒り」を増幅させていく連中の欺瞞を次のように討つ。

……水爆実験反対者の一人である私不満なのは、世の愛国者達が、常に水爆反対の資料を一方に偏して集めるといふ傾向があるということだ。彼らは、ドナウ河や揚子江の

洪水や東北とか九州の冷害による作柄の悪さしかとり上げたがらない。それに、これは重大なことだが、水爆に反対する者も賛成するものも共に、実際にはそれほど南の海の水爆実験を我が身の危険として感じないということだ。これは最も危険なことなのだ。彼らには、一億に近い日本人全体の生死に拘わるといふ事柄は、一億という数の大きさのために実感が無いのだ。（中略）愛国者の多くは常にロマンチックなのだ。劇性への憧憬に満ちている。水爆実験の与える被害の実体が地味な学問的検討を俟って、これから何十年か後にならなければつきりしたことが分らぬということにでもなれば、正義派達は、舌打ちして、また、頃合の緊張を与えてくれる一大事を求め始めるだろう。現代の恐怖すべき事件とは、緩慢なものにして、即発的なものにして、とつくに劇的性質を喪失してしまっていて、常に非情で殺伐なものなのだ。そういう事件への感覚が彼らにはまだ鍛えられていない。そうして、その感覚の未熟さが、やがて、再び色々の事件を惹起すことにもなりかねないのだ。戦争屋も平和屋も、その点で全く浪花節が好きなのだ。

「私」は、水爆実験をはじめとする「現代の恐怖すべき事件」は、「とつくに劇的性質を喪失してしまっていて、常に非常に殺伐なもの」でしかないと感じる。そして、「劇性」に憧れ「浪花節」を嗜好する「正義派達」は、事件に対してロマンチックであらうとするあまり、事件そのものへの感覚が鍛えられていな

いと断じたすえ、「思い出しているその今は常に乾いて殺伐なのだ。人は、今生きている、ただそれだけの理由でもって、今を実感できない。今には色がない。常に実感とは、幾分想像的、また幾分追憶的なものなのだ。我々は今は余りに様々に眼に入れすぎ、鼻に嗅ぎすぎ、耳に聞きすぎ、肌に触れすぎている。氾濫だけがある。その時に強烈にあることに戦いたとしても、その時はすでに、未来の一点に自分を据えつけ、そこから、今を過去と見たてて振り返っているのだ」と考える。

このような認識のあり方が、「夏の末」（前出）に描かれた学友たちの「責任のない心」、すなわち、〈その日〉を（日々）に置き換えて原爆体験を語っていた彼らの「妙に浮き浮き」した表情と根をひとつにしていることはいまでもない。テリー・イーグルトンは『甘美なる暴力』（森田典正「訳」、平成16年12月・大月書店）のなかで、「人の苦しみがどんなに大きなものであっても、他者と同一化できたとしたら、そこには想像力を満足させるなにかがあり、悲劇についていうと、この満足感にはさらにサドⅡマゾのおまけまでついてくる。悲劇が面白いのは、自らは傷つくことがないと知りながら、破壊的空想にひたることを許し、公序良俗に反しない形で死の衝動を解放するからである。破壊にともなったこのリビドーの喜びには、苦悩にはなにがしかの意義があるという道德観が混じっているのかもしれない。悲劇を通じて経験される道德教育にわれわれは満足感をおぼえ、それがどんなに恐ろしい性質のものであっても、単純な刺激にわれわれは喜びを見出す」と述べ、さらに、アメリカ・オクセ

ンバーグ・ローティの「うまく構成され、うまく演じられたとき、悲劇は感覚的、セラピー的、知的喜びとなる。喜びに喜びが重なり、喜びの内にまた喜びがみつかり、そして、喜びを生む」という言葉を引いているが、ビキニ事件を通して自分のなかに隠蔽していた原爆の記憶を呼び戻した川上が敏感に反応したのは、まさに、「自らは傷つくことがないと知りながら、破壊的空想にひたり」、「公序良俗に反しない形で死の衝動を解放」しようとする自己中心的感情であり、苦悩のなかになにがしかの道德観を混在させようとする行為の愚劣さについてであった。

では、そうした悲劇の遊び方に陥らないために、川上は原爆という問題とどのように向き合っているか。さきにも引用したが、原爆で唯一生き残った肉親である父が亡くなったときに書いたエッセイ「父を変えたもの」（『待ちぼうけの自画像』前出）は、彼の考え方を見極める恰好の素材といえる。このエッセイでは、自分の目に映った父が、むしろ歳とともに健康になっていくように見えたと言られる。また、「父の体の中に、原子爆弾によって受けた放射能の影響が、どこかに残っているだろうし、そして、それが、死ぬ前年、医者によって診断された上顎ガンという病名に無関係であるとはいえない。（中略）けれども、私は、父は原爆被害者にはちがいないが、父の病気が原子爆弾によるものだと断定は、軽々しくしたくはなかった」とも述べ、原爆が父の運命を決定的に変えてしまったかのように書くことだけはすまいという姿勢をみせる。そして、

…原爆被害者という特権をあまりふり廻すことも私はきらいである。／東京を初めとする大都会の空襲で、むざんな死に方をした人、あるいは、戦地で、人間の死というにしてはあまりにもむざんな死に方をした兵士たちはたくさんいる。／そういう中で、私の母や二人の妹は、安楽死に似た死に方をしている。しかも、原爆の恐ろしさを末の世まで伝える、その礎となった死に方をしている。いわば死者たちの中のエリートである。／もちろん、原爆を使う側の残酷さについては問題があるが、と同時に、原爆を使わせるように持っていた日本の軍国主義への問題も、同じような比重でもって残っている。／私の母や二人の妹を即死させたものが、単純にアメリカの原子爆弾といえるかどうか。／私は、日本の軍国主義も、同じような暴虐さでもって、私の肉親を奪い去ったのだ、と考えている。(中略)

／だいたい私は、父が、昔から、なんらかの思想に深くとらえられていたとは、思っていない。／だから、原爆によって、特に虚無的になったというほどの思想の転換が行なわれたというふうにも、私は考えないのである。／女との出会いとか、あるいは、教会を失ったために、環境が変わり、付随して変わってくる人間関係、その人間関係の中で覚えるこれまで知らなかった楽しみ。そのほかに、自分は原爆症に罹っていて、いつ死ぬかもしれないという終末的な感覚。／そういつたいろいろの要素が、父を少しずつ変えていったのかもしれないのだ。(中略)今の地球上の人類

のありさまに対して、私は、かなり虚無的な感覚を抱いている。／ごくひと握りの人々だけが、地球上の何十億という人類の中で、比較的平和で安穩な生活を送っている、と私は思っている。そして、その比較的運のよい中に、私を含めた日本人たちの多くも入っていると思う。(中略)私の場合、父の死を知らされた時最初にやってきた感想は、(今度はおれの番か)といったものでしかなかった。

といった言葉で持論を展開する。原爆で亡くなった母や妹たちを「原爆の恐ろしさを末の世まで伝える」「死者たちの中のエリート」と呼び、原爆を使った側と使わせた側の責任を等価だとみならず、いわゆる良識的な見解とはいえない。また、原爆が父の人生を劇的に変えたのではなく、様々な人間関係や終末的な感覚を募らせるなかで「少しずつ」変化したという見方にしても、自分がこうして平和に生活していられるのはただ運がいいからに過ぎないといいたることにしても、原爆や戦争を、戦後日本における決定的な負の遺産ととらえる人々からすれば、思慮の欠けた発言にきこえるかもしれない。だが、この言説のなかで注目しているのは、彼の言葉のすべてが他者の経験と自分の経験を照らし合わせるように組み立てられている点である。彼は、原爆や戦争の記憶を語りたいたのではなく、そうした記憶の扉をひとつひとつ開け放つなかで、自身の「虚無的な感覚」がどこから生れてきたのかを見極めようとしているのである。先述したテリー・イーグルトンの『甘美なる暴力』(前出)には、

アリストテレスが『詩学』のなかで「憐れみと恐れは双生児である」と述べていることが紹介され、「われわれは自分にもおこるのではないかと恐れるから、他人を憐れむのであり、憐れみか恐れかどちらかの感情に欠けるとしたら、もう一方にも欠けるはずである」、「憐れみの対象が非常に身近となり、まるで自分自身であるかのように思えてきたとき、憐れみは恐れに変身する」などと論じられているが、川上の認識もそれに通じるものがある。彼のなかにあるのは、つねに（今度はおれの番か）という恐れであり、その恐れを唯一の根拠として死んでいった人間たちを憐れむのである。「死の一步手前の存在として今生きている、そういう自分へのゆらめくような感情」（『怒りの顛末』前出）。それこそ、川上が文学において問題化しようとすることの原点であろう。

こうして、川上はピキニ事件を契機として、「劇性への憧憬」にもとづいて原爆を語る言葉が、いかに事実への想像力を奪うかという問題を小説のなかに描き込んでいくようになる。しかし、彼が自伝的な世界を小説化していくようになる昭和三十年前後の文学状況には、特に原爆問題をめぐってひとつの大きな潮流があった。それは、恋愛や結婚をめぐる男女の結びつきの背後に被爆者としての苦悩を滲ませ、特に若い女性の被爆者を徹底的に哀れな存在として描く小説が一種の流行になりつつあったということである。たとえば、動員学徒の「ぼく」が軍人である従兄の留守中に彼の妻と肉肉関係をもち、彼女が妊娠するという猟奇的な世界を描いた桂芳久「刺草の蔭に」（『群像』昭和

28年7月）では、妊娠した従兄の妻が原爆によって即死し、それを知った「ぼく」が罪の意識と解放感に戸惑うという結末が用意されている。また、原爆症の兄と妹がお互いの苦しみを慰めるように結ばれる沼田茂の「ある遺書」（『文学界』昭和32年11月）をはじめ、被爆者同士の性を近親相姦のモチーフと結びつける小説も登場する。長崎で被爆した経験をもつ嫁が、自らの発病とわが子への遺伝を恐れ続ける有吉佐和子「祈祷」（『文学界』昭和34年2月）や、被爆者で小頭児を生む恐怖から破滅する女を描く大江健三郎の「上機嫌」（『新潮』昭和34年11月）のように、生まれてくる子どもに原爆症が遺伝することを恐れる女性を描いた小説などは数えきれないほどである。長岡弘芳は『原爆文学史』（昭和48年6月・風媒社）のなかで、ピキニ事件以後の原爆文学では「殊更でない日常生活の風俗と、原爆との結びつき」が顕著になったと指摘しているが、特に恋愛、結婚、性をめぐっては、被爆者たちをそこから遠ざけたり、歪んだ関係として表象したりする方法が常套化している。被爆者が恋愛や結婚にまつわる幻想を抱いたり、性の悦びに浸ったりすることはそれ自体が不幸のはじまりであるともいいたげな物語構造が、きわめて安直なかたちで反復されるのである。のちに井上光晴の「地の群れ」（『文芸』昭和38年7月）を批評した平野謙は、「戦後十八年たつて、被爆者の精神的肉体的な後遺症はますますこじれ、ねじくられて、救いたいトモグイの様相を呈してきたという主題は、やはりずつしりした重さを持っている」（『毎日新聞』引用は『文芸時評（下）』昭和44年9月・河出書房）と記したが、そ

うした「トモグイ」の構造は、ビキニ事件以後の文学状況におけるグロテスクな側面として記憶されていいだろう。

こうした点をふまえて、本稿が話題の中心に据えている昭和三十年前後の社会を性をめぐる状況から俯瞰してみると、注目したいのは、昭和三十三年三月に成立した「原子爆弾被害者の医療等に関する法律」をちようど挟むかたちで売春防止法の公布（昭和31年5月公布、翌32年4月施行）と赤線廃止（昭和33年3月31日をもって廃止）がなされていることである。朝鮮戦争の特需によって経済が急速に成長しはじめ、昭和三十年度の『経済白書』（昭和31年7月）が「もはや戦後ではない」と宣言したこの時代。売春に関する取り締まりの強化は、国家による性の管理であると同時に家族という単位を主体としたモラルの再構築をめざしたものであり、様々なかたちで恋愛や結婚に関する差別・偏見を受けることの多かった被爆者たちを援護する法律が整備されていくことと無関係ではなかった。穿った見方をすれば、それぞれの法整備は、反社会的な性を駆逐しつつ性の弱者を救済することによって性を秩序化し、国家が、健全でまっとうな国民を養成していくための両輪だったのである。この頃の新聞記事を見ると、長崎原爆の日を前日に控えた昭和三十一年八月八日に、アメリカで治療を受けていた原爆乙女のひとり鈴木マサエ（17歳）が、遺書に「原爆ノイローゼ」という言葉を残して自殺する事件が起こっているし、同八月十八日には長崎で被爆した十九歳の女性が被爆者同士の結婚を親に反対されたために農薬を飲んで自殺する事件も起こっているが、そこから見

えてくるのは、被爆者を性的な弱者として固定したうえで、同情や配慮によって保護・救済しなければならないと考えるような「善意」、あるいは、被爆者たちが世間の冷たい視線に曝されないように事実を隠蔽しようとする「抑制」が、いかに人間の尊厳を傷つけるかである。中条一雄は『原爆と差別』（昭和61年7月・朝日新聞社）のなかで、「ザ・レイプ」という小説を書いた作家・落合恵子がインタビュー（朝日新聞）昭和61年1月13日・夕刊）のなかで「強姦のバリエーションはたくさんあります。性別だけでなく、被爆者や在日朝鮮人、身障者などの弱者に対するあつかい、そして偏差値だって、弱者の立場からみれば強姦なのです」とコメントしているのを紹介したうえで、「この小説は男（強者）が女（弱者）を力づくで征服する犯罪にたちむかう女性の「告発の物語」といわれている。私は、落合さんの、被爆者を弱者ときめつけるこのような言葉をみたとき、率直のところ愉快ではなかった。弱い者に同情を寄せるのが進歩的な人であり、被爆者はそのような人たちから、単純にあわれな存在として見られ、軽々しくレイプの対象にされていること。そこまで弱々しい存在としてのイメージが固定しているのか、といった悲しさがあった。こんな考えのもとに、いわゆる作家といわれる人たちに、被爆者をフィクションの題材にされ、同情され、差別されてはたまらない。（中略）原爆に関しては、「放射線―気味悪い―後遺症―不幸―差別」といったパターンがある。それだけに、「フィクションだからといって無責任に」「こわい、悲しい、かわいそう」といった単なる表現のために、被爆者を気

やすく題材に使わないでという思いが深い」と批判しているが、こうした弱者への囲い込み＝秩序化が、「レイプ」という比喩によって語られていることは、昭和三十年前後の被爆者が置かれていた状況を考えると、きわめて示唆的である。彼ら彼女らは、「進歩的な人」から「あわれな存在」と見なされることで、自らの意思によって性的世界を獲得していく自由を奪われているのである。かつて坂口安吾は、「風流」(新潮)昭和26年11月のなかで、「私は残酷なことを考えた」という前置きしたうえで、「これに比べると、原子バクダンのキノコ雲の方がたしかに美しいや。むしろ、明るいかも知れん」／こう呟いた私が悪魔なのではなからう。日本は私にとってもフルサトなのだ。私は泣きぬれていたと云っても過言ではない。／私は無数の原子バクダンが祖国の頭上にバクハツするのを考える。着のみ着のまま生き残った人々が穴居生活をはじめ。ホラアナの中にカストリ銀座もできる」と記しているが、「無数の原子バクダン」によって、誰もがみな同じ立場で穴居生活し、そこに活気あふれる「カストリ銀座」ができあがることを夢想する安吾の言葉は、或る意味で、被爆者を「あわれな存在」として囲い込むことの傲慢さを突く逆説になっている。安吾には、日本がいまだGHQの占領下であり、被爆者をめぐって活発な言論活動などできなかった時代だったにもかかわらず、その後、社会がそれ自体の秩序を形成するために人々をどのように囲い込むようになるかが、いとも簡単に遠望できていたのである。

それと連動するように、川上は「企み」(「文学界」昭和30年2

月)のなかで、メディアによって報じられた殺人や強盗が、事件そのものに対するわれわれの感覚をいかに鈍化させるかという問題を投げかけ、それを次のように表現している。原爆や被爆者に関わることが直接的に語られるわけではないが、構造的には社会秩序が被爆者をどのように囲い込んでいくかという問題と相似型となつているので、該当箇所を引用してみよう。

……そぼろに乱れる初冬の丈の高い枯草や灌木の中を縫い歩く時、進は、いつもある強い実感に襲われるのである。進は歩きながら、ふとこう考える。誰かが木蔭にひそんでいて、不意に自分に短刀でもって襲いかかるかも知れない。或はこんなことも考える。今、自分の家は襲撃され、母はもう息絶えているのかも知れない。しかし進の考えるのは、毎日の新聞記事としての殺人強盗の類のものではない。新聞のそれは疎漏な活字の網に濾された殺人や強盗の滓みみたいなものである。それらの記事はすべて分つてみると、きつと筋道がたつている。金欲しさから、恨みから、恋の鞘当から、こんなことには我々は食傷気味なのだ。新聞によれば、金も物も取らぬ殺人は大抵恨みか失恋か発狂かに決つている。これらは記事にされる途端に全く平穩無事な事件となる。確固たる人の世の秩序や定めから寸分外れていないのだ。だから我々の見聞きする事件は、結局、何一つ、殺人であつたり強盗であつたりするためにはない。我々は、水は流れ落ちたにも拘らず、網に残つた滓を水と思う愚を、



日々犯しているのだ。そうして、或日、真の殺人や強盗を眼前に体験しても、多年の間に、首とされた感覚は、遂にそれをも活字的に認識するに止まり、かくて、その鈍化した実感が逆に働いて、殺人や強盗は止ることなく、犯し続けられてゆくのだ。進が待望するのは秩序の臭わぬ事件なのだ。

……凡ゆる企画性には秩序の悪臭がある。だが、進がこのような企てに思い至ったのは、一般の傍限には、この企てが不可解な行為として映るに違いないと思つたからである。進は自分の行為を、一般の立場から観覧して、享樂したかたに過ぎない。我々の身近には、非秩序的な不可解な現象が、日々、種々、継起しているにも拘らず、人は、それらが、真の不可解事であるその故に、却つてそれを自明の事と看做すのに慣れ、反対に、一般の不可解とする心理のからくりを当込んだる贗不可解事を真の不可解事と思ふものである。進の企図するものは不可解の贗造である。不可解を知る進に真の不可解事を捻出できるわけがなかった。精々贗造が手一杯といった処である。不可解を解せぬ者の行為こそ、不可解事は屢々出来るものなのである。

ここで語られている事柄は、どちらも基本的に同じである。「我々の身近には、非秩序的な不可解な現象が、日々、種々、継起

している」。だが、それがいったん「企画性」(事件として報じられることもそのひとつといえる)と「自明の事」であつたかのように見えてくる。たとえ真の殺人や強盗を眼前に体験しても、真の不可解事に遭遇しても、「人の世の秩序や定め」に慣れ親しんでしまつてゐるわれわれには、それが実感できないというわけである。こうして、いつまでたつても「非秩序的な不可解な現象」としての事件を認識できないわれわれは、実感力の欠如ゆえにまた新たな殺人や強盗を繰り返す……。これを原爆や被爆者の問題に置き換えて考えるなら、われわれは、原爆の惨忍さと被爆者の苦しみ自明とし、彼ら彼女らを弱々しい存在に仕立てることでの内的な秩序を維持しているということになるうか。

だからこそ、川上は「秩序の臭わぬ事件」を描こうとする。「真の不可解事」を知ることができないのであれば、それを「贗造」するしかないと考ええる。被爆者の女性を「占有」するために、わざわざ欺瞞的にふるまつてみせる「夏の末」(前出)の主人公・紀彦にしても、水爆実験について「社会正義を代表する」言葉で議論する連中を侮蔑して、「現代の恐怖すべき事件」は「とつとくに劇的性質を喪失してしまつていて、常に非常に殺伐なもの」でしかないと感じる「或る目ざめ」(前出)の「私」にしても、川上が描く原爆の残像は、つねに「秩序の臭わぬ事件」に覆われている。ロラン・バルトは、悲劇とは「人間のさまざまな不幸を集積し、組み立て、そして、それを必要性、一種の英知、あるいは、浄化の形に変えて正当化しようとする一つのやり方」であり、こうした「悲劇的蘇生を拒絶し、悲劇に屈しない技術

的方法を採しだすこと」<sup>3</sup>が急務だと述べているが、原爆を悲劇として完結させることを徹底的に拒み続ける彼の姿勢もまた、ある意味では、ロラン・バルトがめざす批評的な態度に通じているかもしれない。

また川上は、おびただしい死をもたらした原爆の破壊力を、そこに残された人間たちが発散する生の衝動と重ね合わせるようにして描く。その意味で、彼の手法は秩序からの離反そのものである。G・バタイユは『エロティシズムの歴史』(湯浅博雄＋中地義和「訳」、昭和62年2月・哲学書房)において、「生とは噴出であり横溢であり、均衡、安定とは正反対である。それは爆発し枯渇する。喧噪に満ちた運動である。その果てしない爆発が可能なのは、ひとつの条件のもとにある。すなわち、使い古された有機体が、新しい力を持つて踊りに参入してくる新たな有機体場所を譲る、ということである」と述べ、生の衝動の本質には絶えず侵犯の匂いがたちこめていることを指摘しているが、彼が描く被爆後の長崎は、まさに、死と破壊がすべてを覆いつくしているがゆえに新たに芽吹く生の衝動が比類のない輝きをもつような、有機的な世界として立ち上がるのである。被爆後の長崎における男女の結びつきを占領／被占領、あるいは「ともぐひ」(前出・平野謙)という角度から射抜いていくこと。それが川上が自伝的小説で展開した方法である。ここではそうした認識の集大成として「残存者」(文芸 昭和31年12月)をとりあげてみたいと思う。

#### 4

「残存者」は、敗戦後、部隊から戻った主人公の昌造が汽車に乗って長崎に帰ってくる場面からはじまる。廃墟となった長崎を自分の目で見た昌造は、身内の生存に関する楽観的予測をあっさり棄て、家族全員が死んでいるかもしれないと覚悟する。

そして「案外自分の気持が落着いている」のを訝りながら駅舎に降り立ち、見覚えのある女に出会う。「薄汚れた白い上衣と黒いモンペという身拵え」に、「病み上がりのように」な表情を浮かべ立ちすくむ女は、自分に注がれている視線に気づいて「心もち肩をそびやかして挑むような眼つき」をする。女は、荒んだ暮らしに疲れているはずなのに、男の軽々しい視線を撥ね退ける眼光だけは持ち続けているのである。

この女が通学の途中で毎日のように顔を合わせていた女学生だったように思えてきた昌造は、「不自然なまでの親近感を覚えてくる自分を怪しみながら」女に近づく。そして、こんな感情を抱く。

……この女が美しくなかったとしたら、昌造は、果して、さりげなく知らぬ振りで過す積りであつただろうか。いや、この時の昌造には、多少とも覚えのある顔であれば、凡て懐しく頼もしく思われたにちがひなかった。けれども、こんな場合でも、若い心というものは面子にこだわるものがある。だから、昌造は、女が美しいから自分の女に抱く親

近感は募るのだ、と思いたがった。幾らかはためらいながらも、そう胸の裡にうそぶいてみると、昌造の胸には、俄かに、荒々しい自由な感情が猛つてくるようだった。

彼女が本当にあの女学生だったのかはわからない。もちろん、いま目の前にいる女のなかには、あの頃の潑刺とした面影が失われつつある。だが昌造は、「女が美しいから自分の女に抱く親近感」は募るのだ」と自己暗示をかけ、そういう荒々しい感情を猛らせることに「自由」を感じる。そして、人違いだといひ張る女にあれこれと長崎の様子を尋ね、女の気持ちを解きほぐす素振りをしつつ、次の瞬間には女を無視するようにひとりで歩きます。家族全員を原爆で亡くし、知り合いの家で世話になっているものの、生活のなかにさしたる希望も持っていない女は、そんな昌造のぶつきらばうきに興味をもち、「途切れ途切れに脈略のないことを口走つて彼のあとを」とついていく。二人は、まさに、よく見かける通俗恋愛ドラマの主人公たちのように出会い、微笑みを交し合うのである。

だが、一緒に歩きはじめた女を至近距離から眺めた昌造は、彼女の異様に薄い髪が原爆症によるものであることを、いまさらながらに思い知らされる。「昌造は直接原子爆弾に見舞われた女の体験の重さもしくはその質に就いて想像する上に必要な最小限の知識すら持ち合わせていなかったからである。(中略)女の髪の毛のうすれは原子病の症状であった。昌造は、原子爆弾の放射能を浴びるといふことが何を意味し、ひとりの人間にどれほ

ど重い体験としてのしかかるかということに関する「最小限の知識すら持ち合わせていなかった」自分を、ほんの少しだけ恥じるものの、その感情を一過性のものとして処理し、自分が女に淡い気持ちを抱いたのは「古い物語りや映画などに影響された情緒」への期待があったからだとな得する。そして、女に声をかけた自分の心理を次のように掘り下げる。

……広場を抜け、左に曲ると、急に、腐臭が昌造の嗅覚を押ししてきた。その匂いはどこまでも続いた。何の匂いか昌造は女に訊ねようかと思つたが、それは断念した。明らかにまだ残っている夥しい屍の腐臭にちがひなかった。顔のそこだけ蒼白い女の額の生髪が汗ばんでいるのを横に見ながら、昌造は、一人よりは二人がよい。若い女であれば尚更よい、と思つた。二人だと、沈潜しようとする気分がある点で制せられ、理由もなく、軽くなる。肉親縁者が悉く死に絶えていたとしても、それが必ず不幸でなければならぬ訳はなかった。奇妙にも、遠隔の土地の大火事を見物するために急ぐあの野次馬の無責任な嗜虐的な感情に似たものを自分の胸の中に幾らか見つけて、昌造はその処置に窮する思いがした。けれども、そんな困惑を意識すると、尚更、それに対抗するように、自由な気分は募ってくる。全く過去と絶縁された今からは、一切の筋書が勝手気儘につくれるとでもいつた気持であった。

強烈な死臭があたりに漂うなかで「残存者」としての自分を意識する昌造は、対岸の火事を見物する野次馬のような無責任さで廃墟を眺める。そして、こうした嗜虐的な感情があることに困惑しつつも、自分は過去と絶縁されたのだという自由な気分浸る。昌造にとつての女は、ある意味で、そうした気分を保持させるための道具立てに過ぎないのである。たしかに、原爆そのものを体験した人間の多くは、想像を絶するような苦しみの中かで死んでいったかもしれない。だが、自分は「残存者」としていまもこの世にあるのだから、死んでいった人間たちの苦しみに思いを寄せてそれを引き受けて生きていく必要はない。そんな安っぽいヒューマニズムを押しつけられるのなら、いっそのこと、肉親縁者を亡くした人間を「必ず不幸でなければならぬ」と決めつけるような視線そのものに反発して、徹底的なエゴイストとしてふるまってみせよう……。彼はそれこそが「残存者」であることの責任だとみなしている。

だからこそ、この小説の語り手は、なんの前提もなく昌造に感情移入して彼の内面に寄り添いながら世界を観察するような方法はとらず、エゴイストとしてふるまう昌造と同じように、そのとき女が抱いていた感情を並行的に描く。ひとつの出来事を男の側と女の側から二元的に捉えることによつて、二人の男と女の関係性における非対称的を際立たせようとする。たとえば、さきに引用した場面についていうと、女は女でこんなことを考えている。

……髪が抜けてきた。朝眼が醒めるごとに女は自分の躰を調べ、斑点の無いことを確かめた。斑点が現われることはそのまま死の予兆として、人々の間に流布されていた。女は、いつも、明日になればその斑点が現われるかも知れない、と思つて暮らしていた。長崎の至る処に、死に瀕している原子病患者がいた。そういうことがいつも女の頭にあつたので、女は、やがて来るかも知れぬ己の死を異変として感じとることができなかつた。女は、この日、ふらふらと何という目当もなく誰か知つた人とも会うかも知れぬと思つてやつてきた。そうして、昌造と出会つた。昌造が、女には、新鮮な晴れやかな存在として映つた。晴れやかな存在に照らし出されてみると、女は、自分に死の匂いが迫つてゐることを初めてのように感じた。死の観念は、まつわる一切の装いを脱いで、端的に姿を現わしてきた。今、女は、寛いだ胸の中にも、今までになく、来たるべき死を切実に握りしめていた。死に怯える人間は、平凡な生活の一こま一こまも過去のでき事を顧みる時に伴う一種劇的な感覚でもつてうち眺めるものなのかもしれない。女はこうして見知らぬ男と歩いている自分を、あの過去の事々に對する時の感覚にくるんで、哀しい安らぎを覚えていた。自分が今日、外出したそもそのもそのも気が求めていたのはこの感覚であつたのかも知れない。女はそうおぼろげに感じだつていた。

死に瀕している原爆症患者があまりにも多いため、「やがて来るかも知れぬ己の死」を「異変」として感じることができずにいた女は、昌造という「新鮮な晴れやかな存在」と出会い、そこから逆照射されることで死を切実に握りしめるようになる。死に怯える自分のなかに、過去の平凡な生活を「劇的な感覚」で眺める自分を発見する。そして、いま「見知らぬ男」と一緒に歩いている自分をそうした「劇的な感覚」にくるむことで「哀しい安らぎ」を覚える。あまりにも異常な出来事に遭遇したがゆえに驚く心を失っていた女は、昌造との間に芽生えつつある緊張感によって、たとえ一時であっても、自分という存在を新たに更新していくことの喜びを取り戻すのである。

こうして、原爆を体験せずにすんだ「幸福者」でありながら、心のどこかに「漠とした不安と焦燥」を感じている昌造と、原爆ですべてを失い、自分もまた迫りくる死に怯えている「不幸者」の女は、まったく異質のものが擦れ合うときの摩擦によって火が生じるように、お互いを照らし合い、それぞれが感情の振幅を強めていく。それは決定的な立場の違いであり、中途半端に共有される要素がどこにもないがゆえに、ある意味でお互いを対等にする。川上は、もともと、誰にも凭れかからず自分ひとりで立っている人間であり続けることを信条とし、小説のなかでも自分ひとりで立っている人間を描き続けようとした作家であるが、こと原爆という問題をめぐっては、被爆者を「弱者」（『まなざされ、手をさし延べられ、可哀想がられる存在）とし、直接的な被爆を経験していない者を「強者」（『まなざし、手をさ

し延べ、可哀想がる存在）という図式を壊し、それぞれが対等に自分を中心化していくような関係に固執しているといえる。彼は、記憶の継承だとか未来への警告だとかいったスローガンに象徴される大義名分をもつて原爆を記述するようなことはしないが、それを経験した人間と経験していない人間のあいだに絶対的な仕切りを設けることで、むしろ、お互いが対等でいられる関係を描くことに賭けているのである。

女とともに爆心地にほど近い自宅跡に向かう昌造は、やがて、自分のなかに「孤独とも自由ともつかぬある感覚」が拡がっていることに気づく。そして、「感傷にしろ、思い出しろ、それが培養されるためにはそれなりの書割を必要とするのかも知れない。昌造はこの時、感傷や回顧に一向に唆かされぬ自分にむしろ戸感った。人間は、どんな場合でも、己の立たされている情景に己を似せようとするのだろうか」と考えながら、目の前にいる原爆症の女を強姦する衝動にかられる。

何げなく振向いた昌造の眼に、女が、髪を風に吹かれて、地にさしこまれた竹の棒を見つめていた。女を見たことで急に、昌造は、自分がここに来た意図を改めて自分に問うてみた。そうして、不意に、問いに対する答えとすり替えられる工合に、怪しく燃えるものを自分の躰の中に覚えた。いかに感情を動かすべきか、いかに振舞うべきか方途のつかぬこの場合、この昌造の肉体の想念は、自分へ心中だてするもつとも手近な演技であった。この辺りには、人影が

ないこと、そうして、半壊のトイレの浴槽の向う側が、燃えかすの堆積との間に、地形を窪ませていることなどを、昌造は眼ざとく調べ確かめた。あそこに女を引入ればよい、と思った。／昌造の顔が再び自分に振向いた時、女は、昌造に男を感じた。けれども、危険感は抱かなかつた。待ち設けることも身構えることもなかつた。何をされても自分は抵抗しないことだけがはつきりわかつていた。／昌造は、やがて女から眼を逸らした。昌造は、当初から想念だけで終ることを知った上での想念であつたような気がした。行動に移るのは億劫だつた。しかし、女が抵抗する気配を見れば、荒唐しいものに魅せられて、昌造は、女の牀に挑んで行つたかも知れなかつた。この時の昌造の心の動きは道徳とは何ら関係がなかつた。

この場面を、男性の女性に対する性暴力を正当化しようとする醜悪な記述として糾弾するのは容易い。いわゆる「道徳」的な考え方からすれば、暴力や威圧によつて相手を屈服させようとする主人公の異常性そのものが問題にされるはずである。だが、ここでみなければならぬのは、行為そのものの「道徳」性ではなく、昌造がどのような「心の動き」によつてそうした衝動に駆り立てられているのである。昌造が「想念」のなかで犯そうとしているものは何なのかということである。また、ここでの昌造が女を原爆症の患者とみなす意識が完全に消失していることにも注目したい。昌造は、原爆症に付随する様々な

「書割」を括弧でくくり、ただの雄と雌という次元で相手に「挑んで」いこうとしているのである。  
実はこの小説には、昌造がこのような衝動を覚える直前の場面にひとつの重要な伏線が張られている。それは、二人が浦上駅跡にさしかかったときに見かけた、きわめて敗戦後のな光景である。

……爆音が近づき、白人水兵の分乗した何台かのトラックが徐行しながら傍を通り抜けて行つた。昌造は、何年ぶりに白人を眼にするもの珍しさと、彼らに抗わねばならぬような気分的強制からくる工合わるさとの混つた妙な気持であつた。トラックの上の水兵たちは、喚声を女の上に乗せて、次々と過ぎてゆく。最後のトラックが過ぎた。そのトラックから何かが二人の方に投げられた。遠ざかるトラックの上で好奇的な眼が並んでいる。昌造の視野の端で人影が動いた。昌造はその方を見た。赤ん坊を背負つた内儀風の女が、紙に包まれたものを拾つていた。板子ヨコか何かのようだつた。赤ん坊が俄かに泣き喚いた。その女は腰を伸ばした。腰を屈めた直後のせいひか、その女の陽灼けた顔は、いつこくな感じに充血していた。中年女は遠のくトラックに向つて叫んだ。／「父ちゃんも坊主も死んだじやなかか」

この後、昌造は、女が手にしたチヨコレートをもみくちやに

して下駄で踏みこむのを目撃する。そして、白人に対して何の怒りも示さなかつた自分の無為を譏られるのではないかという圧迫を感じる一方で、その女の振る舞いに、なんともいえない「神経の鈍さと誇張された感情」を見たような気になる。大声で白人を罵倒した女の方が、自分と一緒に歩いてきた女よりも、精神の痛手からかなり回復しているようにさえ感じる。果して、次の瞬間、赤ん坊を背負った女は突然ひき返してきて自分が踏みこむにじつたチヨコレートを拾いあげ、昌造たちにチラッと卑屈な眼を向ける。そして、もう一度、トラックの消え去った空間に向けて罵つたあと背中中の赤ん坊に甘い声をかけて、泥を払つた中身を握らせる。

昌造はこの光景に衝撃を受ける。「自分の意識からある飾りのようなものが剥げ落ちる」のを覚える。そして「中年女の中に誇張を見たと思つたその自分の心の方に、この焦土にそぐわぬ歪みがある」と感じる。昌造のなかに傍らの女を強姦してみようとする「想念」が芽生えるのは、この場面の直後である。昌造は、自分のなかに「この焦土にそぐわぬ歪み」があることに気づかされ、その「歪み」が内側に鬱屈していく嫌悪感を払拭するように、女への衝動をつのらせるのである。

さきにも言及した通り、「敗戦直後の日本で「アメリカ」は、尊大なマッカーサーが見事に演じてみせたように徹底して男性的な家父長の役まわりを演じていた。(中略)この絶対的な家父長を前に、「日本」は急速に去勢され、いわば「女性」化されていった」(吉見俊哉「総説」冷戦体制と「アメリカ」の消費——大衆

文化における「戦後」の政治学——、岩波講座 近代日本の文化史9 『冷戦体制と資本の文化』平成14年12月・岩波書店)経緯をもつ。占領期の日本社会は、力強い家父長としてのアメリカが誇示する「男性」性を前に、「女性」化され、アメリカの寵愛を受けるために様々な媚態を演じながら復興を推進したというわけである。そして、このレトリックは、広島と長崎に投下されたふたつの原爆にも適用され、原爆はアメリカの「男性」性を決定的に見せつけることによつて日本を「去勢」し、おとなしくさせる役割を果たした……と合理化される。すなわち、原爆のおかげで日本は意味のない本土決戦を断念し、それにともなつて莫大な犠牲者が出さなくて済んだ、というわけである。こんな詭弁は、もちろん戦後のGHQがつくつた占領する側の論理にすぎないが、ともかく、そのようにして原爆は神話化され、日本がアメリカを非難することができない仕組みをつくりだしているのである。そして、それはある意味で、強姦という行為に及ぼうとする男たちが自分を正当化するために用いる詭弁に似ているし、自分の女を犯された男が女に向かって投げつけるやり場のない怒りにも似ている。痛めつけられる側への想像力をもたない強姦者は、きつと、「俺はお前のことが憎くてあんなことをしたんじゃないんだ。俺の気持ちをおかしてくれ」と嘯く。

傍観者の多くは事件に深く関わることを忌避し、「不運な出来事だ」と思つて早く忘れた方がいい」と論ず。そして、自分の恋人や家族を犯された者のなかからは、こんなふう罵る男が出てくるかもしれない。「どうしてもっと抵抗しなかつたんだ」と。

小嶺敦子は、強姦された女に対する男たちのまなざしを「レイプ神話」とよび、「被害者側に落ち度がなければ加害者は強姦しなかった」、「本当にイヤな行為に対しては最後まで抵抗し防衛できるはずだ」（小嶺敦子「レイプ神話を追いつめる」、『文藝春秋』平成8年8月）という認識を潜在的にもっている男がいかにか多いかを告発しているが、原爆に関してアメリカがつくりだした詭弁もまた、それと同様の論理構造をもっているのである。

チヨコレートを投げた白人たちと、彼らを罵りながらチヨコレートを拾って子どもに与えた女のエピソードは、こうして、犯す側としてのアメリカと犯される側としての日本が縮図化された光景となり、必然的に、そこに立ち会った昌造にも舞台への登壇を促す。ここでの昌造は、自分の女を強姦された男という役割を演じさせられることで「去勢」された日本のメタファになるのである。

昌造が原爆で痛めつけられた女を「想念」のなかで犯そうとするのは、そうすることで「去勢」された自分の身体に荒々しい力をみなぎらせ、自分を自分という軌道のうえにしつかり乗せようとしているからにはかならない。「去勢」されたままおめおめと生きていくことが、とてつもなく羞しいからにはかならない。作家の富岡多恵子は鶴見俊輔との対談「強姦についての私の考え」（『思想の科学』特集「強姦論」、昭和60年4月）のなかで、「男は、自分の恋人なり奥さんなり、一番愛してると思っている人が、自分の目の前で暴力でそれをやられた時に、どういう心情を持つだろうな、ということに私は非常に興味がありました

ね。その男が強姦を事故と割り切れるかどうか」、「その後一緒に暮らしたりする場合、その事故を心理的にどういうふうに始末していくのか……」と発言しているが、川上が「残存者」のなかで突きつめようとした問題も、ある意味ではそこに関わっている。原爆によつて傷つき、死の影に怯える女と一緒に歩き、心を通わせていくなかで、昌造は、自分がその女とどのように関わっていきけるのか（あるいは関わっていけないのか）という問題を鋭く突きつけられるのである。

ばらまかれたチヨコレートを介して、占領者としてのアメリカが保持している圧倒的な権力性を見せつけられた昌造は、自分を猟奇的な衝動へとかりたてることによつて、目の前の女をひとりの女として直視しようとする。ここで肝心なのは、実際の行為としてのそれではなく、自分の在り方に関する「想念」の問題である。川上は、はじめての単行本『或る目ざめ』（前出）を刊行したとき、その「あとがき」に、「僕は、いつも、一つの作品を書き了ると、次の作品は永久に書けないかもしれない、という不安におそわれる。だが、今まではまだそういうことはない。力は力を呼び必要は必要を呼び、その新たな力、新たな必要が次の作品を書かせてくれるらしい。／僕には一つの予感がある。ちようど、用事をすましたところに予定にはなかった新しい用事を思い出し、チラと時計に眼を走らせるような工合に、僕も、あと生きる時間が残り少なくなったそんな時に、急にやらねばならぬ仕事を思いついて慌てて人生の目もりを読む時がくる予感がある。／僕は、いつも、自分の軌道にのつていな



い気がしてならない。自分の在り方に甚だ不如意を感じている。だから僕は書いてある。唐突な言い方かもしれないが、僕が人間の一人として僕以外には絶対になれないということ、僕が必ず死ぬということ、そういういいことが羞しくてたまらないことがよくある」と記したが、「残存者」における昌造もまた、「自分の在り方に甚だ不如意を感じている」人間のひとりなのである。

だが、この後、自宅跡にたどり着いた昌造は、「御両親、御弟妹の御遺骨お受取願います」と書かれたメモが竹の棒にぶらさげられているのを見つける。そして、「今自分の置かれている立場が一切明瞭になったために、却って、収拾のつかぬ心に追いやられて」いく。そういう自分を見られていること自体が厭で、女を憎むような素振りをする昌造に対して、女は、「家族を失っただけの、我が身は少しも傷ついていない青年」の幸福を壊さないためにも、自分は青年が去ったあとで帰ろうと、乾いた心で考える。そして、昌造の煙草を一本だけ吸わせてもらい、烈しく咳き込んでしまう……。こうして、「疲れたわ」とか細い声を出す女を放っておくことができなくなった昌造は、つつけんどんに女をおんぶして坂を下りていく。小説のラストシーンには、次のような場面が用意されている。

「紐をつかんで、な、首が痛いから」／昌造は、こう言  
って歩き始めた。女の風に靡く髪が首筋にかかり、昌造は、  
女の匂いを嗅いだ。不意に、男の肩に顔を伏せて、女はク

ックツと低く笑いを忍ばせた。今の自分とこの青年の間に起っているようなことが、何千年の昔から幾度となく繰返され、今また、自分らがそれを踏襲している、とでもいった女の気持だった。そういう気持の中では、原子爆弾も原子病も、殊更取り上げれば大仰になりそうな気がして、一度笑ってみると、尚更笑いを抑えることができなくなった。咳きこみながら、女は、哀しい心の寛ぎを覚えていた。(中

略)／女は、昌造の肩に頬を寝かせて、眼の上に吹かれ靡く自分の髪に瞳を当てている。風が一際募ってきた時、昌造は、また、前向きのまま声を荒げて言った。／「紐を持ってなきやあ、紐を」／こういう間だけ、二人の心は一つに溶け合っているようであった。けれども、ひどく危つかしい溶けかただった。明日の朝、いや、僅か一時間後のことに就いてさえ、自分らがどこにいて、どうしているのか、などということを二人は考えようとしなかった。この二人には、一時間後の自分たちに就いて思い廻らすことは、死後のことを考えるのと同じくらい遠い先のことに思われていたからである。

こうして二人は、「原子爆弾も原子病も」殊更に取り上げるほどのことでもないような自由な気持ちになる。先のことは何も考えずに、いまをいまとして享受しようと思いはじめる。原爆を体験し、身体が原爆症に侵されていくことに怯えて生きている女と、自分だけが無傷のまま生き残ったと考えている男は、

体験の共有でもなく、記憶の継承でもなく、ただ「何千年の昔から幾度となく繰返され、今また、自分らがそれを踏襲している」という感覚のなかに安住しはじめ。このとき、ついさつきまで彼の内面を覆っていた猟奇的な衝動と女が怯えていた原爆症への恐怖は、まるで相殺されるように跡形もなく消滅し、二人は、「今」という「ひどく危うかしい」瞬間に身を委ねる。

体験というものを、その当事者ですら言語化できない何かだと考える川上は、それまでも、原爆の体験を過去から未来へと引き継がせようとする夥しい言説と距離をとり、個人の問題をヒューマニズムの問題にすり替えようとする動きには烈しく毒づいてきた。彼にとつての原爆とは、誰にも予測することのできない破壊の出来事であり、それがのちに原子爆弾と名づけられ、体験者の証言によって様々な事実が明らかになったときに私たちが知ることになる事後的な認識とはまったく違うものであった。「残存者」のラストシーンには、そうした川上の認識が寓意的に示されているのである。

「残存者」には広島・長崎が蒙った空前絶後の出来事をめぐって、語り手が原理的な説明をする場面があり、

……原子爆弾は、奇蹟への信仰を、その程度の差こそあれ、その被災地の住人達に植えつけてしまったのである。人類の誕生以来、原子爆弾を体験した都市は地球上に二つしかない。それをある時ある場所で人が体験できる確率は、万が一という文字通りを遥かに超える僅少なものである。だ

から、原子爆弾に見舞われた人は、殆ど当ることが不可能なクジに当たったようなものだ。それだけでも、充分当たった当人には一種の奇蹟となりうる、だが、そういう奇蹟はあとになってみれば原子爆弾だったと知られることが前提となつていたのである。だがここに言う奇蹟への信仰とは、あとで知つた原子爆弾から生れるのではない。何万何千の人命家屋を粉砕する得体の知れぬ力が全く唐突に落下してきたその事に由来したものである。人々は、自分の家が、会社が、学校が、工場が直撃弾を喰つたのだと思つて、塵埃の中に起き上がり這い出してみると、薄暗さの中に、眼の届く限りが壊滅して、妙に赤味を帯びた炎が燃えさかっているのを見たのである。原子爆弾と知るまでのあの何日間かの体験から、人々は原因も分らぬ想像もつかぬ一大事件というものが突発しうることを知つたのだ。あとからなされるいかなる合理的な説明も、この認識を完全に払拭することは不可能である。この点に関する限り、原子爆弾被災地はいかなる他の空襲被災地に対しても己の特異性を主張しうる。この意味では、今後落下されるかも知れぬ原子爆弾があるとしても、また、それがいかにこの当初のものとは比較を絶した威力を持つていようと、それは、長崎や広島原子爆弾とは全く別個の単に威力の大きい爆弾に過ぎぬであろう。

という説明がなされるが、この言説をふまえていうなら、川上

にとつての原爆体験とは「いかなる合理的な説明」によつてさえも払拭することのできない突発的な出来事がこの世にはあるということを知る体験である。

だからこそ、「残存者」における昌造は女の体験と自分のそれが絶対的に乖離しているという事実から目を背けず、相手のなかに自分が踏み込むことのできない聖域があることを自覚したうえで相手を自由にしてやる。原爆のことを語りたければ語るのがいいし、沈黙したければ沈黙すればいいというかたちで、相手にニュートラルなポジションを与え、自分も同様にする。そして、決定的に違つてしまつてゐる二つの軌道が、たまたま「いま」という地点で重なり合うことの悦びを存分に味わう。被爆者もまた自由なのだということを、身をもつて体現しようとする。

## 5

昭和三十年までの間に、「その掟」（新表現「昭和29年6月」）、「初心」（三田文学「昭和29年11月」）、「或る目醒め」（群像「昭和30年6月」）が三期続けて芥川賞候補となりながら、結局、落選を続けていた川上にとつて、この「残存者」をはじめとする原爆を題材とした小説を発表していくことは、ひとつの賭けだったにちがいない。たとえ間接的であろうと、原爆で廃墟になつた長崎と、そこに生きる人々と接触してゐた経験をもつてゐることは、作家としてひとつの武器であり、それを書くことで自分の

殻を脱ぎ棄てようというもくろみもあつただろう。だが、川上は結局この賭けに敗れる。そして、原爆はもとより、純文学そのものと絶縁していく。「文学をよそうと思ふ」（新潮「昭和33年6月」）は、文字通り、純文学からの撤退を宣言する文章である<sup>4</sup>。

……ボクは芥川賞が欲しくてならなかつたくせに、芥川賞に権威だけはなんとしても認めるわけにはゆかなかつた。それは戦時中「気をつけ！」と号令をかけられる時のひどく屈辱的な気持に似て、ボクは芥川賞を考える屈辱に耐える工夫をしなければならなかつた（中略）芥川賞という書割の前でボクは声を出して、ボクの事態の真相を確かめる必要があつた。ボクは四回目の芥川賞候補になるボクに期待をかけていた。（中略）ボクは受賞の言葉を用意し、写真のポーズや表情まで考え、友人たちに読んできかせたり、姿勢をとつてみせたりした。フラッシュが焚かれる。臉の裏面に眼笛が浮く。「もう一枚撮りますから」俯向いたためにやや顔面を充血させたカメラマンが口疾にそんなことを言う。ボクはそういう場面を退屈な上廁や寢床の中で想像したりした。

原爆による家族の死や、原爆症の不安をほぼ実話のまま小説化し、自信をもつて発表したにもかかわらず、それらは芥川賞候補にすらならなかつた。そんななかで、石原慎太郎や大江健三郎や開高健といった若き才能が登場し、自分はどんどん埋没

していく。「ボクは必ずしも悪い作品を書いてはいないのに芥川賞と縁を切られてしまった。それまで新人群の先頭をきつて峠に向つてゐるつもりだつたのが、いつしか下り坂にさしかかつてゐるようなのをボクは自衛本能の足裏に感じていた」。「ボクは、ボクの醜悪によつてボクの愛するとり残された現実になりかわつて、話題的現実に一泡吹かせてやつてゐるつもりなのだ。

それに、なにせ醜悪はボクの手合つてゐる。世界一等のエヴエレストにしてみても、写真の中に定着されてみると、それだけのものではないか。或る欠除感があるではないか。第一等のものから受けるボクの印象には常にそういう欠除感があり、具体的迫力とは却つてその欠除感に原動力を持つてゐるものらしい。

ボクにとつて現実には欠除に充ち充ちて、ボクは、その欠除の断片のきらめく洪水の中を泳ぐか溺れるかしなければならぬのだ。それも、ことさらぶぎつちよにある。純文学作家としての華々しい世界から置き去りにされた川上は、その「欠除感」そのものを問題化し、エロスの領域を極めることで生々しい人間の姿を捉えるようになる。長年にわたつて勤めていた高等学校教師も辞め（昭和35年）、ハイティーン向けのジュニア小説を経て、昭和四十三年頃からは現代人の性を赤裸々に描く官能小説によつて「失神派」と呼ばれるようになるのである。

「失神派」作家として絶頂を極めた川上は、その後、原爆について言及することがなかったが、そんななかで唯一、『夜のブルー』（昭和48年1月・新潮社）という官能小説には、「宮永の父は、長崎でプロテスタント教会の牧師をしてゐた。／原子爆弾が長

崎に落ちた時、宮永は、母や妹たちを失つた。／彼の父親は生き残つた。原爆を受けて生き残つた牧師というのは、世界中でも、おそらく宮永の父一人かもしれなかつた。ほかに、おそらく広島や長崎で被害を受けた牧師家庭はあつただろうが、全滅してしまつて、生き残つてゐる者がいない。／だから、アメリカの教会の信者たちから送られてくる物資は、宮永家だけに集まることになつたのである」といふ、かつての自伝的小説を髣髴させる描写がある。だが川上は、ここにとんでもないどんでん返しを用意し、原爆という言葉性を性エネルギーの隠喩にする。

宮永は、とうとうその日は古川紀代の体を抱けずじまいに終つた。／古川紀代が、蛙がつぶされるような声を出したのは、宮永と十度目くらいのデートの時だ。／明らかに反応がちがつていて、すさまじい声が紀代の口を衝いて出たのである。その声の中に、宮永は、紀代が今覚えているただならぬ感覚を確かめていた。／紀代の背中にはうぶ毛が渦を造つてゐる処があつた。その渦を見ながら行うのも宮永は好きだつた。／ベッドの枕許の木枠に手をかけて、反動を使つて行うのである。それは、犬のスタイルと同じものだが、反動を使う処が犬とはちがつてゐる。／宮永は紀代に、そのやり方することを「原爆落し」といつていた。／その「原爆落し」に移ると、俯伏せになつた紀代は顔を左右に振り始める。／日曜日午後一時に紀代に会うと、別

れはいつも夜の九時ごろになった。

女をエクスタシーに導くための体位を「原爆落し」と名づけること。それは、原爆を人類の敵とみなし、その悲惨さを訴える人々にとつては不謹慎きわまりない言葉の暴力に映るだろう。

また、原爆に関するこうした比喩は、のちにプロレス技にも登場するし、様々なメディアのなかで巨大なエネルギーの表象として用いられるようになるが、まさか、原爆によつて家族を喪い、自身も原爆症の症状があらわれることを極端に怖れていた川上が、こんなことを書くとは……と呆れる声も聞こえてきそうである。だが、ここで川上が狙っているのは、原爆という言葉を悲惨な出来事として語ることを自明化し、それ以外の文脈に用いることを不謹慎だと考えるような禁忌の押しつけ、あるいは、現実そのものと言葉の表象を同じレベルで考えようとする乱暴な議論への抵抗である。何かを体験すること、何かを語ることはまったく違う次元の問題であり、それを思维的に接続させて過去と未来の間に筋道をつけることは、ひとりひとり存在を抹殺し、人間というものを抽象化していくことに他ならないという主張である。かつて、ヒキニ事件が起こったとき、被爆者に注がれる同情のまなざしが逆に被爆者を性的な場所から遠ざけ、結婚や恋愛の自由を奪うかたちで作用したように、原爆という言葉が聖化することは、その言葉を遣つて生きていく人間を不自由にしていく。だからこそ、川上は、わざわざ官

能小説のなかで原爆で生き残つた主人公が、「原爆落し」で女をエクスタシーに導く様子を露悪的に描くのである。その意味で、川上宗薫は、純文学と官能小説の間をひとつの一貫したスタイルで跨ぎきつた稀有な作家だつたといえるかもしれない。

## 注

1 「西日本新聞」（昭和24年12月29日付・朝刊）によれば、この懸賞論文の応募総数は九三四点。一等は該当者なし、二等2編、三等4編。三等に入った川上は賞金千円を獲得している。ただし、この論文が活字化された形跡はないし、川上自身も随筆「どうでもいいことばかり」（『待ちぼうけの自画像』前出）のなかで、「その論文は活字になることはなかった」と回顧している。なお、川上の回想によれば、大学二年生くらいの頃、「朝日新聞」の「声」の欄に投書して採用されたのが初めての活字体験だということである（「どうでもいいことばかり」、『待ちぼうけの自画像』前出）。なお、「九大文学」の昭和二十四年七月号には「川上翠雨」の号を用いた俳句が掲載されている。「おどろき」という題で十の句が並んでいるが、その第六句と第七句の間に「浦上天主堂跡（一九四六年三月）」という小題が入っていること、および、この時期の「九大文学」が実質的に川上が所属していた学友会文芸部の機関誌だったことを考えると、この句も同氏の創作にまちがいないだろう。

2 昭和三十二年に制定された原爆医療法（原子爆弾被爆者の医療等に関する法律）として改定されたのち、平成7年7月、新援護法制定にともない廃止）では、被爆者の基準が、「直接原爆被爆をう

けたもの（一号被爆者）、2 原爆投下後、二週間以内に爆心地には  
いったもの（二号被爆者）、3 被爆者を看護したり救援活動にあた  
り被爆したものの（三号被爆者）、4 原爆投下後、被爆者の胎内にい  
たもの（四号被爆者）」と定められているが、昭和三十年前後にな  
された法整備の過程で問題になったのは、被爆者を両親またはどち  
らかにもち、両親またはどちらかが被爆後に命を授かった者、ある  
いは、母親の胎内で被爆したのちに生まれた者たちをどのような基  
準で被爆者と認定するかであった。彼らは一般的に被爆二世（第五  
の被爆者）とよばれる。全国被爆二世団体連絡協議会、原水爆禁止  
日本国民会議「編」『被爆二世の問いかげ』（平成13年7月・新泉社）  
によれば、この被爆二世は「全国に三〇万人とも五〇万人とも」い

われ、「被爆者と同じような苦しみ、悩み、被爆者が放射線の急性  
放射線障害に苦しみ、後遺症に苦しみ続けている一方で、被爆者の  
苦しみはそのまま未来世代へと引き継がれてきている」という。

3 Poole, *Tragedy: Shakespeare and the Greek Example*, なお引用は  
テリー・イーグルトン『甘美なる暴力』（前出）P. 108より。

4 実際には、「文学をよそうと思っ」を書いたのちにも、二度、芥川  
賞候補になっっている。「シルエット」（「文学界」昭和34年7月）と  
「憂鬱な獣」（「新潮」昭和35年5月）がそれである。しかし、川上  
の場合は、それらも受賞には至らず、彼の文学的転向を促す結果と  
なる。